

報告等

- ニホンザル研究林

- 29 -

イッチを入れ煙火を爆発させる装置の実験を、11月、12月の2ヶ月間行い、実際にサルが12回煙火システムを作動させ、人手の行きわたらぬ山畑、とくにシイタケ畑などでの猿害化に対する有力な方法として、期待されることとなった。

4. 屋久島研究林

共同利用研究により、照葉樹林帯中上部と海岸域の食性の比較(上原・丸橋)、自然群の統合機構(古市・三谷)の研究がすすめられ、西部林道の群れの夏期の定期センサス(研究林・屋久島研究グループ)をおこなった。

「屋久島の生物的自然と地域社会との調和に関する研究」(代表・依田恭二、日本生命財団助成研究)によって、この地域の生態系の保全に関する基礎調査を行なうこととなった。1973-1976の屋久島研究グループによるヤクニホンザルの調査成果が雑誌にはんざる5号に公刊された。

また、研究林予定地に隣接する瀬切川右岸域と永田灯台一瀬切間の海岸斜面の民有林が、それぞれ国立公園の第1種・第2種特別地域に編入、第1種特別地域に昇格することが決定した。この結果、国割岳西斜面と瀬切川流域を核として生態学的に有効な巾をもった垂直分布帯が保存されることとなった。

サル類保健飼育管理施設

竹中修朗, 松林清明
後藤俊二, 松林伸子¹⁾

人工授精によって誕生を見たチンパンジーの子供のポポ、レオについては、レオの方は最初母親のレイコの哺育に不安が見られたが、飼育技術員(担当・熊崎)の調教により子供の抱き方を覚え順調に育てている。人工哺育によらざるを得なかったポポも、施設スタッフの努力により順調に育った。昭和58年春にいずれも一才の誕生日を迎えたが、ポポは体重6.7(出生時1.9)kg、レオも4.5(出生時1.48)kgに達した。

昭和55年度に発足した繁殖コロニーでは、昭和57年春～夏にアカゲザル28頭の出産(出生率61%)をみた。同年9月には8頭の子ザルを研究用に初めて供給した。1～2年後には定常的な研究使用

が可能になると思われる。

昭和55年度からサル施設の管理部分の飼育場所を6区画に分け、それぞれについて担当者を決め飼育を行って来ている。長期間同一区画のサルの飼育を担当することにより、飼育のレベルアップを意図したからである。同時に飼育技術員は通常の飼育業務、採血等の研究補助業務の他に、特定の施設業務活動を分担することになった。これには飼育、繁殖関係として1)チンパンジーの人工授精、人工哺育、2)室内計画繁殖、3)研究用ケージの設計・試作、また保健・診療関係として1)細菌検査、2)血液検査、3)病理検査、4)寄生虫検査等が含まれる。

人事では前任の千葉敏郎助教授の岐阜大学農学部教授への転出(昭和57年3月)に伴い、空席となった助教授を公募により求め、松林清明助手が昇格した(昭和58年6月1日付)。

研究概要

1) 雄ニホンザル性機能の季節的变化に関する形態学的ならびに生理学的研究

松林清明

性ステロイド濃度や精液性状の変動を調べると共に、各生殖腺の組織学的変化を光顕的・電顕的に行っている。

2) サル類の人工繁殖の研究

松林清明

チンパンジーの人工授精適期を把握するため尿中LHの簡易定量を行い、血中LHおよび性皮腫脹の推移との相関を調べている。

3) ニホンザルの成長に伴う眼内視所見の推移

後藤俊二

人工哺育及び母親哺育個体を対象として、単色光撮影法による眼底像の形態変化及び前眼部透光体の屈折率の変化についての継続観察を行った。

4) ニホンザル四肢奇形の原因探求

後藤俊二

血液検査を主とした臨床病理学的検討を共同研究の一環として進めている。

論文

- 1) Matsubayashi, K. and K. Mochizuki (1982): Growth of male reproductive organs with observation of their seasonal morphologic changes in the Japanese

1) 教務職員